

(1) 地域総合研究センターの活動について

地域総合研究センターは、地域社会と大学を結び、地域の課題に取り組むとともに、大学の教育・研究活動をより意義あるものにする様々な活動をおこなっている。

地域社会と松本大学における研究活動との結びつきは多様である。地域総合研究センターは地域と大学とをつなぐ大学側の窓口として設置されているが、①かなり事態が進んで、組織的な対応が必要となっている場合、②地域の側からどこにどう相談すれば良いのか困っている場合等で有効に機能している。②の様なルートの場合、まだ海のものとも山のものとも分からないような状況から始まることも多いが、教員個人が地域の方々と懇談や交流を深めていくという段階が存在するのは当然で、これは至極自然な成り行きである。

またテーマによっては、大学全体と言うよりは、学部あるいは学科単位で取り組まれる場合も見られる（次図参照）。特に人間健康学部が設置されてからは、理系としての特徴がそれまでの総合経営学部や松商短期大学部とは趣を異にしているので、学部や学科でしか取り組めなくなっている課題も増えてきている。あるいは、講義の一環としての資格取得のための実習そのものが、地域の側から見れば、地域の活性化への取組となっている場合も多い。このような実態を踏まえると、地域総合研究センターとして、センター機能の拡充を図るのか、学部・学科の独自性を一方で抱えるような対応をするのか等、新しい方途が探求されなければならない地点に来ているのかも知れない。いずれにせよ学部学科のアクティビティを、何らかの形で報告書として残して行く方策を考える必要があることを示唆している。

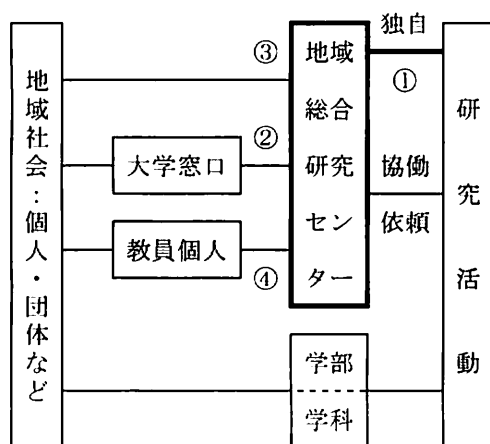


図. 地域社会と松本大学の地域研究活動を結びつける多様なルート

さて地域総合研究センターの活動は、前図にも記しているように、おおむね次の4つに分類することができる（上図①～④に対応）。

- ① 地域活性化のために研究センターが独自に企画立案して研究を進めている活動
- ② 地域社会から大学（代表者）としての学長を含む）に対して協力依頼があったものをセンター研究員である本学教員（グループ）が引き受けて行なっている活動
- ③ 地域社会から地域総合研究センターに対して協力依頼があったものに対して、センター研究員である本学教員（グループ）が引き受けて行なっている活動
- ④ 地域社会から、研究分野からみて妥当と思われる教員個人に対して協力依頼があったものを、その教員がセンターに持ち込んで行なっている活動

2007年度においては、特に文部科学省の「地域共同研究支援」事業に多数の事業が採択（学部30件、短大部9件）され、当センターの活動範囲も大きく拡大した。近い将来、本誌に研究成果が発表されることになる。特に2007年度に設置された人間健康学部の教員による新しい分野の研究が多数実施され、地域とつながりも多様化し、さらなる拡がりをみせている。

1) センター運営委員の構成

今年度のセンターは、学内運営委員として、中野和朗（委員長）、白戸洋（主任研究員）、住吉廣行、木村晴壽、木内勝義、矢内和博、外部からの研究員として運営委員会に参加する玉井袈裟男、今井朗子、岩原正典、建石繁明、事務担当として松田千壽子、腰原季都子、合計12名である。尚、当センターの研究員は、松本大学並びに松本大学短期大学部の全教員である。

2) センター会議

平成19年度 地域総合研究センター会議

全体会議は年2回開催、その他企画ごとに担当者レベルでの打合せ会議を実施

3) 活動内容（詳細は後掲）

2007年4月より2008年3月までの活動について以下の項目に関する報告を行うものとする。新規の事業としては、新学部の開設に伴う新しい地域との共同事業が開始された。

a) 継続的活動

1) 地域づくり・まちづくりに関する講演会などの開催

1) 「人にやる気・村に活気・地域づくり」学習会 Part 6

講演会その1「そばはみんなを元気にするーそばの地域づくり実践ー」

講演会その2「昔のそばのものがたりー知って得する豆知識ー」

2) オープン・カレッジ「女性起業家に学ぶー街おこし・村おこし・自分おこしー」

Part 4 「母の心を持つ農産加工所ー地域の食材を生かした農産加工所の経営」

2) 地域づくりの事業の実施と支援

1) 山形村の地域福祉経営に関する事業

2) ユニバーサルデザインの普及活動

3) コミュニティ・ビジネスの支援・展開

4) 産・学・地域連携による地域活性化

3) 大学が主催する人づくりのための学習活動の実施

4) 地域における学習事業への参画・支援・研究

1) 公民館事業との連携

2) 栄養士会や行政との連携による健康づくりー学科を中心とした取組ー

5) 地域社会への囲碁の普及と世代間交流の活性化

1) 大学が主催する囲碁の普及に関する活動

2) 地域社会と協力して営むー会場の提供と運営への協力ー

1. 地域づくり・まちづくりに関する講演会などの開催

ここでは、主な活動内容の概要を紹介する。

1) 「人にやる気・村に活気・地域づくり」学習会 主担当：玉井袈裟男研究員

講演会その1「そばはみんなを元気にするーそばの地域づくり実践ー」

講演会その2「昔のそばのものがたりー知って得する豆知識ー」

研修旅行 福島県会津若松市

「人にやる気・村に活気・地域づくり」学習会は、自らの地域の課題を捉え、地域の個性や風土を生かして、知恵を絞って地域づくりに取り組んでいる地域とそれを担う人々に学び、実践につなげていこうという趣旨で、地域づくりを担うキーマンの講演会と実際の取り組みを現地で学ぶ研修ツアーの二部構成で実施されてきた。これまで、岐阜県清見村（'03年度）、滋賀県犬上郡甲良町（'04年度）、兵庫県豊岡市周辺（'05年度）、三重県多気郡（'06年）を対象として実施してきた。

'07年6月30日に実施された講演会では、福島県から会津きり屋代表取締役の唐橋宏氏、長野県から「飯田そばの会」会長の仁科保氏を迎え、玉井袈裟男研究員の案内によって、

“そばを活かした地域づくり”の実践について学んだ。講演会には学生を含め約100名が参加し、活発な質疑応答も行なわれた。また、講演終了後に、蕎麦打ちの実演も行われ、その技術の素晴らしさを体験することができ、ひと味違うそばに舌鼓を打った。

一方10月27、28日の研修ツアーには34名の参加者があり、玉井研究員がインストラクターを務め、福島県会津若松市で行われていた日本そば博に参加したほか、会津きり屋などを視察した。講演と研修旅行の詳細な内容については、報告を掲載している。

2) オープン・カレッジ・パネルディスカッション「女性起業家に学ぶ」

主担当：今井朗子研究員

地域では多くの元気な女性たちが地域づくりの中核として活躍している。本研究センターでは、女性たちの起業事例をお聞きし、共生社会の女性による地域づくりの可能性について考えることを目的として、女性たちから学び、女性の地域づくりのネットワークを創っていこうという趣旨で、オープン・カレッジ「女性起業家に学ぶ」として、パネルディスカッション形式で平成16年より開催してきた。

本年度は第4回目として、9月4日に、下伊那郡喬木村に本社・ジャム工場のある、「小池手造り農産加工所有限公司」代表取締役の小池芳子氏を講師としてお招きし、「母の心を持つ農産加工所ー地域の食材を生かした農産加工所の経営ー」というテーマで本研究センター研究員の今井朗子氏をコーディネートの下で講演会を開催した。講演の詳細な内容については、報告を掲載している。

2 地域づくりの事業の実施と支援

住民が主体となって、自ら地域を創造していくための、地域づくりの取り組みが各地で展開されているが、本研究センターは、地域づくりに関わる研究を行うとともに、地域のニーズに応え実際に参画しながら、地域づくりを支援することを活動の重要な柱に据えている。

2007年度は以下のような地域づくり事業の実施と支援をおこなった。

1) 山形村の地域福祉経営に関する事業（2002年～）

山形村・山形村社会福祉協議会と松本大学は、2002年度から山形村の地域福祉経営についての共同事業を実施している。

ア) 2007年度は、前年開設された多機能型ディサービスセンター（宅幼老所）の「コミュニティハ

ウス・建部の里」を拠点として、地域づくりに参画してきた。建部の里には、社会福祉実習の学生が2名、コーディネーターとして派遣され、事業を展開している。特に、社会福祉協議会において、コミュニティ・ビジネスを展開する「ぼぼねっと事業」では、「そば」に加え、障がい者が従事することが可能な仕事として新たに「ブルーベリー」の収穫・販売についての取り組みを開始し、障がい者と学生が協力して、ブルーベリーを収穫し、販売や加工などを行ない、今後商品化することが期待されている。

イ) 2004年度から継続されている、住民が参画して地域の未来や地域福祉のあり方を考える「創ろうやまがた・プロジェクトY」については、コミュニティ単位の計画づくりに取り組んだ。

ウ) 2005年度から実施している「希望の旅事業」では、障がい者を対象とした旅行を日帰り1泊2日のプログラムを大学のバスを使用して学生が企画・運営して実施した。

2) ユニバーサルデザインの普及活動(2002年～) 主担当：住吉広行研究員

まつもとユニバーサルデザインネットワーク研究会への協力・協働

今年度も本学研究員(住吉)が研究会会長となって、UDの考え方の普及など、企業を中心とした会員の皆さんとともに、その運営に協力した。会の構成員である松本大学からは、住吉会長のほか清水聡子氏も会員として活動している。また、本学からは尻無浜、廣瀬(合同庁舎でのUDレビュー)の二氏からの支援もなされている。

ア) 2007年度は、第4回ながのユニバーサルデザイン松本大会及び第1回全国ユニバーサルデザイン市区町村シンポジウムを開催し、後者では熊本県知事・潮谷義子、帯広市長・砂川敏文、京都府八幡市教育長・今井興治、白馬村長・太田紘照、松本市長・菅谷昭の諸氏等を招いた講演会、シンポジウムを行った。前者では小学生を含むユニバーサルデザイン・アイデアコンテストを昨年度に引き続き実施したが、応募者数が着実に増加している。

イ) 松本市ユニバーサルデザイン推進基本指針策定への協力

松本市から、ネットワーク研究会への依頼に応じ、「松本市ユニバーサルデザイン基本指針策定委員会」に委員を送り(本学関係者は住吉・清水)、意見書作成に協力した。松本市はこの意見書を参考にし、基本指針を策定することになっている。

3) コミュニティ・ビジネスの普及活動(2004年～)

本研究センターでは、2004年度よりコミュニティの課題を、ビジネスの手法で解決していく、コミュニティ・ビジネスを地域づくりの重要な方策として位置づけ、その普及や支援に取り組んでいる。コミュニティ・ビジネスは、身近な地域で住民が主体的に地域を創造していくための有効な手段であり、学生が地域において実践的に学ぶ機会と捉えている。2005年9月に学内に設置した「地域づくり考房“ゆめ”」と連携してコミュニティ・ビジネスについて研究・実践に取り組んでいる。

① コミュニティ・ビジネスの支援・普及・研究活動

ア) これまでの実績

本研究センターでは、地域の特産品の復興や商品化などに取り組んできた。地域で実践されている事業への支援として、山形村の「ぼぼねっと事業」、NPO法人「人にやさしい街づくり推進協会」の「ベロタクシーによるタウンモビリティ事業」、松本市田川地区まちづくり推進協議会と連携した「松本駅西地域まちづくり事業」等を行なっている。また、各地の研修会、講演会に教員を講師派遣する等、コミュニティ・ビジネスの普及活動も行なってきた。

イ) 今年度の活動 -教育活動への導入-

さらにコミュニティ・ビジネスをテーマとした教育活動を展開し、観光ホスピタリティ学科のゼミナールの一環として、オリジナル商品を開発・販売を行なうなど、演習や講義のアウトキャンパ

ス・スタディとして、コミュニティ・ビジネスの事例を活用している。またこれらについての研究成果は、長野県生涯学習センターや長野県産直サミットなどにおいて発表した。

② コミュニティ・ビジネスを通じた街づくりの実践への参画

コミュニティ・ビジネスは地域の課題を解決する手段であり、本研究センターではコミュニティ・ビジネスを中核とした、以下のような街づくりの実践活動に参画している。

ア) 松本駅西口まちづくり事業（2004年～）

高齢化が進む市上西町会において、「歩いて暮らせる街」や「アルプスの景観を守る街」を理念とした街づくりの活動に、学生・教員が参画し取り組んできた。本年度は、高齢者の溜り場、生甲斐づくりの仕事の場として、2007年4月に開店したコミュニティ蕎麦店「いばらん亭」の支援とアルプスを眺望する景観を守り活かすかという課題に取り組んだ。「いばらん亭」は、地域の拠点としても、蕎麦屋としても一定の成果をあげ、地域づくり推進の中核施設となっている。また、景観については、住民の地道な取り組みが身を結び、松本市が景観条例を施行するきっかけとなった。住民意識の高まりと景観条例の施行により、アルプスの眺望が守られている。さらに、駅前に進出した企業が地域と協議して景観を配慮した形で看板を設置するなど、行政、企業、地域が一体となった地域づくりが進み始めている。

イ) 安曇野市ブランドデザイン会議黒豆プロジェクト（2007年～）

2007年度より、安曇野市が進める地域ブランド推進事業（「安曇野観光ネットワーク推進協議会」の発展的展開）に、観光ホスピタリティ学科の教員を中心としてアドバイザーとして参画している。特に長野県中信農業試験場において品種改良された「信濃黒」の栽培普及や商品化の推進に取り組む黒豆プロジェクトに教員、健康栄養及び観光ホスピタリティ学科の学生が参画している。成分分析調査や試食会の開催、ロゴやシールの製作、パッケージデザインの考案、販売システムの検討など、ブランド会議や食品製造企業と協力して実施した。

4) 産・学・地域連携による地域活性化

以上の事業に加えて、松本市中心市街地の活性化、グリーン・ツーリズム関連、特産品の開発での農業活性化等の事業、「アルプスフロント懇談会」（NPOのネットワーク化）など、様々な地域・分野で地域づくりの実践活動へ参画し、それらを踏まえた研究を実施した。

また長野県内の地域の食文化を掘り起こし、その継承を図るとともに、地域づくりに結び付けていくことを趣旨とした「信州フードパーク」プロジェクトについては、総合経営、人間健康、松商短大部において、「地域と食文化」「食と文化」「食品学総論」の講義を通じて、アウトキャンパス・スタディも取り入れ、各学部教務委員会の支援を得て、学生が地域の食文化を直接学ぶ機会をつくる事が出来た。

2007度は学生のアイデアによって、地元新村の特産米「くれき野米」や伝統野菜「松本一本ねぎ」を使ったミニ弁当「カップドン」を、株式会社サークルKサンクスと共同で開発し、2008年1月に長野県内全店舗において2週間限定で発売し好評を博した。

3 地域総合研究センターが主催する人づくりのための学習活動の実施

地域総合研究センターでは、2002年度より玉井研究員及び岩原研究員を中心として、地域の課題を解決する人づくりとネットワーク作り、さらには特に高齢者の知恵の活用を目指し、学習活動を企画・運営している。

2007年度においても、「三郷及木老人クラブとの交流学習会」、「キャリアスクール（一念発起の会）」（9回実施）、「勿体無いをそのままにしない会」（12回実施）に取り組んだ。

「三郷及木老人クラブとの交流学習会」は、昭和30年の農村での生活について、交流学習会を通じて記録を作成している。記録作りを活用して、農村における生活文化や知恵を多くの人々に伝えるために、季節の行事の再現や「国営アルプスあずみの公園」における安曇野の歴史と生活文化の紙芝居の実演などを行ってきたが、その成果をとりまとめ、2008年3月に「続老人たちのおきみやげ」として昭和30年代の生活記録を昭和10年と現代とを比較しつつ、とりまとめ松本大学出版会より刊行した。

4 地域における学習事業への参画・支援

本研究センターではこれまで、地域における学習活動を地域づくりの重要な基盤と考えて、県下の公民館などの社会教育機関と連携してきたが、特に2007年度は人間健康学部の新設に伴い、健康、スポーツ、栄養などの各分野にその活動を拡大した。2007年度における主要な活動は以下の通りである。

① 公民館事業との連携

地元の新村地区公民館を初めとして松本市内外の活動に年間を通じて学生、教職員が参画した。また、昨年に引き続き松本市北部公民館の中高校生が中心となる異世代交流事業「街角コンサート」にも学生・教員が参加した。特に地元の新村公民館の事業には、学生が視聴覚委員や館報編集委員をつとめるなど、学生も参画して大学として積極的に対応している。(詳細は松本大学アニュアルレポートを参照のこと)

② 栄養士会や行政との連携による健康づくり —学科を中心とした取組—

健康栄養学科では、学科を世間に認知してもらうこともかねて、栄養士会などとの連携の下、栄養教育や公衆栄養分野での活動が進んでいる。スポーツ健康学科でも、個別運動処方に基づいた健康づくりの活動を、学生参加のもと行政、町会などと結びついて精力的に進めている。これは学生にとっては、現場実習の意味合いを持っているので、健康福祉政策を司る行政、参加者、大学の三者全てにとってプラスになっており、いわゆる all win の関係にある。

5 地域社会への囲碁の普及と世代間交流の活性化 主担当：峯岸芳夫・住吉広行

この分野では、3つの形態で活動を展開している。大学には、碁盤、碁石、時計などが揃っていること、長野県の中心にあり交通の便が良いことなどから、多くの囲碁団体から会場提供校、囲碁普及の基地として頼りにされ、今やなくてはならない存在になっている。

1) 大学が主催する囲碁の普及に関する活動

①第6回松本大学「ヒカルの碁」少女少女囲碁大会の開催

大学が独自に主催して開催している企画がある。一つは一世を風靡したマンガ「ヒカルの碁」に因んで行われている小中学生を対象に行っている少女少女囲碁大会である。子供のころから囲碁に親しみ、高齢者との交流もできるようにと、底辺の拡大を目指して開いている。2007年度で第6回目を迎えた。

②松本大学オープン囲碁教室の開催

もう一つの独自企画が「松本大学オープン囲碁教室」の開催である。地域住民の方々を対象に毎週火曜日の夜、本学峯岸芳夫を代表とする、囲碁普及ボランティアグループを結成して指導に当たっている。

2) 地域社会と協力して営む企画 —会場の提供と運営への協力—

①空穂記念館主催「一就塾」への協力（峯岸）

新村地区に隣接する和田地区に建つ「窪田空穂記念館」が、伝統文化の継承の視点から、日本棋院東京本部棋士・藤沢一就八段等の協力を得て、囲碁普及活動「一就塾」を開催している。これに峯岸や住吉が協力している。

②長野県高等学校文化連盟囲碁部会主催の行事への協力（峯岸）

次に二つの県大会に、会場を貸すと同時にその運営にも協力している。また、県内の進学校の参加者も多く、本学の紹介を兼ねて、本学のパンフレットも配布している。今年度は長野県が北信越大会の担当県に当たっていたことから、北信越大会の会場校にもなっている。

第31回文部科学大臣杯全国高校囲碁選手権大会・長野県大会並びに段級位認定大会

平成19年度高等学校囲碁新人戦兼北信越大会予選長野県大会

第23回北信越高等学校囲碁選手権大会

第2回全国高校囲碁選抜大会北信越地区予選

③長野県学校囲碁連盟主催の行事への協力（峯岸）

小中学生囲碁団体戦長野県代表選抜大会に対して、会場を提供すると同時に、その運営にも協力した。

④テレビ松本三冠囲碁大会への協力（住吉・峯岸）

地元ケーブルテレビ局が開催する囲碁大会に対して、会場提供とともに、大会運営への協力を行っている。今年度は第6回目の大会で、大森泰志八段と、人気女流棋士、梅沢由香里氏を招いての盛大な大会となった。松本大学がなければ実施できないとまで言われている。

⑤市民タイムス杯中信地区囲碁大会への協力（住吉）

地元紙が主催する市民タイムス杯中信地区囲碁大会に対して、競技委員長を派遣し、スイス方式の指導などその運営に協力している。